

このことは教派性の意味そのものを解消するものではない。しかし一つのからだにつながっていることをそれぞれの教派性に優先させなければならぬことを意味する。逆に「一つの教会」であることが教派の意味やそのあり方を決定することを意味する。あのパウロの教会の「一つの教会」が地域教会のあり方をきめたのと同じ関係であって、パウロの時代の地域教会が現代では教派にもあてはまることになる。かつて「一つの教会」であることが、個々の教会をこえて見える形で現わされなければならなかったとすれば、現代の教派主義の時代においても同じことが云えるであろう。しかもそれは本質において制度によらない一致の、見える表現であるべきなのである。それはひとりのキリスト者、一つ一つの教会、教派がそれぞれ全体としての教会につながるものであることの意味とそれに基づく視点による。

「一つである」ことは神のみわざとしての教会の事実そのものである。「一つとなる」という教会の機能的側面は教会自身の、また教会による変革のみわざとして証しされるはずである。しかし現実には「一つの教会」はこれまでの現代の教会にとって何であつたらうか。

十九世紀後半以降の現代のいわゆる福音派の形成過程において「一つの教会」は抽象化され、形骸化され、個人のキリスト者や教会のあり方にはほとんど関係のないものとされてしまったといわれる。一八四六に設立され福音主義運動に大きな役割を果たしたエバンジェリカル・アライアンスにすでにその「危険な個人主義と歴史的な神の民への関心の欠如」ゆえにアングリカンの福音主義者の多くが同調せず局外に留まった。一九世紀末が近づくにつれてケック集会のような霊的運動の影響の拡大とともに、「ひとりひとりのキリスト者が属している見えない教会」が「一つの教会」の理解として広く受け入れられ、そこにある個人主義が目立つようになり、教会の歴史的継続性への関心は失われてしまったという。背景には次第に浸透していたリベラリズムへの反動としてひとりひとりの明確な救いの強

調があり、救われたものの個人的な霊性が最大の関心事となったことがあつたのであろう。もともと生まれかわった信徒の全体としての教会、組織化された地域の教会の二面で教会を理解するのは分離派の立場であつたし、そこに普遍的教会の非現実化の傾向はあつたとしてもそれが福音派そのものの特長ではなかつたであらう。しかし周囲の非福音主義への警戒が結果としてキリストのからだとしての教会の一体性を、個人的な信仰の立場の共通性に基づくものとする結果となつたのであれば、こうした現実が福音派そのものの立場と同一視されるようになったとしても説明はつく。ここでは「一つの教会」「見えない教会」が生まれかわつたものの全体として、地上の「不純な教会」と対立させられるだけではない。「一つの教会」が地上にある教会について強調されるとき、不純な教会の不純のままの統合であり不純そのものの拡散と拡大でしかないと考えられる。こうした考え方の傾向が福音派的なアメリカの教会、戦後の日本の福音派のあり方やその教会観に強固な枠をはめてしまったのであろうか。その結果としての分立的教会観はひとつの流れとなり、その中にいてそれと意識できないものになっているのではなからうか。

パウロの教会理解において「一つの教会」は抽象でもなく理想でもなく教会の現実であり、地上の教会の現実であつた。しかしそれは制度によらない現実であつたことが確認されなければならぬ。後の歴史において制度、組織が「一つの教会」のわざに大きな意味を持つことは否定すべくもない。しかし少なくとも「一つの教会」を制度、組織の枠の中でだけ考えることは妥当ではない。むしろ「一つの教会」は制度、組織のあり方を決め、またそれを越えて動くことにおいて地上の現実なのである。プリンガーは教会を勝利の教会（召天者）、戦う教会（世にあるもの）に分け、後者をさらに見えない教会（神のみが知られる）、見える教会（真の信仰者と形式だけの信仰者を含む）に分ける。この考え方は教会の全体を考えやすい特長がある反面、すでに召されたものを含めての、キリストをかしらとする有機体としてのからだの性格を表現できない。「一つの教会」は「世の始めからのすべての選ばれたもの」を合

む見えない教会と別のものではない。それぞれの時代に生き、あかしされる教会でありつつ歴史を貫くつながりをもっている教会である。見える教会は見えない教会の対立概念ではない。しかし両者は同じではない。見える教会には救われていないものが含まれているとするのも現実的だからである。地域の教会は「一つの教会」の対立概念ではない。前者は後者をその地域で代表する。しかし地域の教会は、救われていないものを含んだままで「一つの教会」を代表しうるのであろうか。地上の教会は地上にあるゆえに麦も毒麦も並列している存在なのであろうか。あるいは本当の教会は救われた者たちだけで、その周辺にそうでない人がいるという存在なのであろうか。地域の教会はどのような意味で「一つの教会」と対立する存在でないのか。地上の教会が不純な教会として純粋な「一つの教会」と対立させられてはならない理由は何か。それは地上の教会のこのような性質が、神がご自身のみわざを行わせるために地上におかれた教会の本質と目的によるものだからである。宣教が行われ、聖化がすすめられ、また罪が明らかにされるところが継続していることこそ地上の教会が生きているしるしであり、その特質なのである。地上の教会は生きて働き、戦っていることにおいてキリストのからだとして地上にあることを理解するのである。救われていないものを含めての教会ではなく、救われていないものとの確かな接点を内包する教会なのである。いわば完成へのプロセスにあって生きている教会であり、地域の教会が「一つの教会」を代表するとき「一つの教会」だけでなく「一つになる機能」を代表するものである。「一つとなる」ことは救われたものたちの一致という聖別のわざと、救われるべきものたちの教導を矛盾なく含むであろう。

「一つの教会」の見える表現

それが不純でなくプロセスにある群れとして理解されるとき地域教会は「一つの教会」を代表するものであると同時に「一つの教会」の部分であると云えるのではないか。もちろんこの場合、部分の総和が全体となるということではない。部分が一つで全体を代表することもできるし、同じような部分が数ヶで、また不特定の多数で全体を表すこともできる。一つの部分は他の部分と重なり合うこともできる。しかしかしらとしてのキリストを軸とするという関係からは、どのような部分もすべて同心円的につながっている。小さな円でも大きな円でも上下の関係はない。各地域教会の結びつきは、それがどのような形であっても、その直接の結びつきの外側にある教会や、教会の群れと切り離せない関係にあることを認めてこそ有効な存在の場を持つことになる。

「一つの教会」は歴史的に一つであり、地上的に一つである。しかも和解の福音によってキリストのものときれたものをだれ独りとして除外することはできない。したがって教会が一つであることをひとつの形であらわすことはできない。特定の教派教団が一つの教会と考えられるときそれは「一つの教会」の正しい表現へのあかし、また告白としてである。しかし現実には制度組織そのものが「一つの教会」とみなされ、そのことによって他と離れ他と対立し得る。他を認めないわけでもなく、他を含めての、全体としての「一つの教会」はここでも結果的に抽象化されてしまう。意外にも教会が一つであることを一つの形態のみによって表わそうとすることが、教会が一つであることの表現を困難にしている。「一つの教会」の観念化、抽象化は分離主義や特定の福音主義だけの罪でない。

「一つの教会」が求める変革の方向

福音的エキュメニズムの必然

近代の教派主義の歴史の検証の必要について既に述べた。このようなマクロの視点の必要性の自覚は直接にはエキュメニズムとその展開を契機とするものであった。戦後のキリスト教界の指導理念としてのエキュメニズムの

実体が何であるにせよ、一致の必要の自覚そのものは歴史的な必然の帰結である。エキュメニズムそのものの方向を拒むことはできない。それどころかエキュメニズムを既定のものとする立場の現状は福音主義に内在する、「一つの教会」のゆえの真のエキュメニズムの確立を要求する。

第二バチカン会議は「エキュメニズムに関する教令」によって「一致の再建をすべてのキリスト教徒の間に促進することは、聖なる第二バチカン会議のおもな目的の一つである」と宣言している。エキュメニズムを問題にする背景として同じ教令は次のような状況分析をしている。「諸世紀の主はその恩恵のご計画をわれわれ罪人に対して英知と忍耐をもって遂行されるのであるが、互いに分裂したキリスト教徒の中に最近になって後悔の念と一致への憧れをいっそう豊かに授けはじめられた。」此の分析そのものは間違いない。しかし教令が「一致の再建」を語るとき、宗教改革によって失われたものの回復を意味することは明らかである。現在のエキュメニズムが教会の組織的統一を意図していないものである以上、それがそのまま現在のカトリックへの諸教会の復帰―それがどんなに望ましくても―などという簡単な図式によるものでないこともまた明らかである。しかし、ローマ・カトリック教会がすべてのカトリック信者にたいし「時のしるしをみとめて」エキュメニズムの働きに「賢明に参加するように勧告」していることは今日のエキュメニズムがローマ教会にとって十分同調しうるものであるばかりではなく、同教会の世界戦略の基本に据えられているものであることを示している。今日のエキュメニズムはローマカトリック教会を含む世界のキリスト教界の明白な潮流であるだけではない。現代の教会の信仰のあり方や行動の原理として作用していることこそ重視しなければならない。

ローマ・カトリックのエキュメニカルな戦略は、決して対プロテスタントの関係にとどまらない、むしろ諸教派を越え、異教世界との関係の位置づけまで及んでいることは改めて留意する必要がある。ローマ・カトリックはまず東方正教会、そして英国教会、さらに西欧の「わかれた兄弟たち」がローマ・カトリックの大きな交わりの中にあることを主張する。それは洗礼にすべてが要約され、ローマカトリックとして譲ることのない特有の教理も、一つの教会のとらえ方によってこれらの集団との段階的な一致を妨げるものではないとの理解によるものようである。さらにこの図式はイスラムとその延長を含み、ついには誠実に求めるすべてのものを救いの中に位置づけるのである。

このようなローマカトリック的理解の本質は中核に何を置くかは別としてプロテスタント側の一般的理解においてもむしろ共有されているのではない。諸宗教の間に相対化されたキリスト教理解は救いの内容の希薄化によってカトリック的理解と無理なく関連する。

いわゆる福音派の教会は全体としてこのエキュメニズムの問題性を見てきたし、それゆえに多くの場合これと一線を画してきた。しかし近代の歴史そのものの検証が今求められていることを認めるなら、歴史の事実としてのエキュメニズムの位置づけとエキュメニズムへの対応は福音派の教会にとって基本的な問いなのではないか。

既に見たように福音派のエキュメニズム批判が、教会であるゆえにある一致、すでにある一致を語りつつ、結果的に一致の抽象化に留まることは、この時代におかれた教会の立場として正しくはない。一致の、見える表現は、教会が見える存在である限り基本的な要求だからである。まして分裂的状況の結果的肯定は福音派であることの正当性と疑わせるものではない。

それでは福音主義はエキュメニズムをどのように理解し、行動することができるのか。それは「一つである教会」が、和解の福音による固有の「一つになる教会」として機能することによって表現されるエキュメニズムというべきではないか。そこで求められるのは「分裂をいやす努力によって得られる一致」ではなく、「和解の福音のゆえに与えられている一致」の表現である。それは組織によって表現されるものではないし、「一致の状況の表現でもない。そ

これは教会の中で、また教会によって外に向かって働き続ける和解の福音の、生きている現実そのものの表現でなければならぬ。見える教会の一致、見える教会間の一致である。この場合の教会とは先述のように救われていないものを含みつつ救いのわざのために機能している、見える教会である。救われるべきもの、この世との接点を内包している教会なのである。このような教会が、一つであることを表現するのは、本来の目的のための具体的協力の推進のためであるし、そのための努力によってであろう。聖書的エキュメニズムに求められていることは、キリストのからだとして機能するもの、働くものとしての教会理解であり、同じ目的のための「一つの教会」の存在の自覚である、またそれに基づく教会形成と教会のあり方の再検討なのではないか。

このことは「一つである教会」が「一つとなる」働きに生きていくことの証である。制度によらない一致の現代的表現でなければならぬ。教派の目的も「一つの教会」の、「一つになる」あるいは「一つにする」はたらしきのためのもっとも有効的な単位としてのそれである。教派がそれぞれ「一つの教会」であると主張することによって他との見える関係、見える共働が損われてよいものでもない。聖書的エキュメニズムは、本来のエキュメニズムがもっているはずの本質の確認であり、現代の流れとしてのエキュメニズムの是正運動でなければならぬ。

それでは教会のあり方の再検討は具体的に何を求めるのであろうか。地上の教会は組織が大きくなり、歴史が長くなると、地上的安定のゆえに変革がより困難になる。教会の本質は変わることはない。しかし変化する時代に奉仕する教会、みわざの歴史的進展の中で仕える地上の教会が変革を拒むべき理由はない。プロシユのいう教会の構造上のファンダメンタリズム^⑤は、「一つの教会」の、この時代におけるよりよき表現の大きな妨げでありうる。形態の固定化による枠は「一つの教会」の成長を拒む枠でもありうる。教派の存在そのものも、それがいわゆる教派主義となれば壁でしかなくなる。この場合クンディの次の発言は的はずれではない。「教派の区別そのものは、われわれが

その中に生きている社会に分割されたキリストのイメージを与えてしまう。」^⑥この場合教会のルーツからの成長が、教派のあり方によって妨げられているとする分析も不当ではなくなる。

教会のルーツからの成長のために、地域教会の位置づけが改めて問われるように思われる。地域教会が「一つの教会」のその地における表現であるにしても、その地域教会はその地の人々が救われてキリストのものとされることによって初めて成り立つわけである。その地の人々という単位をぬきにして教会のあり方を論じることができないのはいうまでもない。パウロは各地の教会の成立と成長のために労し続けた。それはあくまでもそれぞれの教会がキリストのからだとして機能するためであって、パウロの支配下におかれるためではなかった。それぞれの教会の人々は自らキリストに忠実であることに努め、主のもとめについて判断し、宣教のための主体となるべきであった。このことが地域の教会の自治 (Local autonomy) の発生する歴史的な現実であり、このことは機能する教会として極めて自然であり、「一つの教会」と対立するどんな要素もなかったであろう。地域での教会の存在はその地の人々への神の顧み、その地のキリスト者への神の信任のしるしであり、Local autonomy はその地の教会の、神の信任への応答であり、従順の行為なのである。地域教会を別の組織に対して従属的に位置づけることは、その活力を制御し、教会のルーツからの成長を困難にする。問題は「一つの教会」を地上で表現することと地域教会の自治の関係の理解である。しかしこれも対立する概念の調和に求められるのではない。「一つの教会」を表現しつつの、またそのための自治なのである。地域教会は誤謬から守られ、「一つの教会」をよりよく表現するために、「一つの教会」のより広い現実の中での営みを自覚していかなければならない。教会の成長は一つの働きの中にある兄弟教会の存在を自覚し、新しく生みだされるべき教会への責任を理解することによって実質化して行くのではないか。

初代教会の成長拡大の理由として、真理への非妥協的な忠実さと、それゆえの、状況への柔軟さの調和が挙げられ

る。真の柔軟性、適応性がみことばの真理へのゆるぎのない誠実を条件とすることは特に留意すべきであろう。教会が一つであることの表現も、ローシユがいうように「雑多なものを包括することを通して得られるものではなく、本質的なものを把握し、それを発展させることを通じて、もっとも確実に到達できる」種類のことだからである。それは神の主権性を極限まで認める教会のあり方なのである。かつてないほどに世界が一つであることを時代そのものが認めさせられている現在、教会は一つであることをかつてないほどに表現しなければならぬ。世界宣教はこのことと別ではない。

注

- ① G. E. Ladd *A Theology of the New Testament* (Grand Rapids; Eerdmans, 1974) p. 532.
 - ② 同書、五三二頁。
- 諸教会の間で明白であったパウロの権威の性格についてラッドはそれぞれが道徳的、霊的なものであることを指摘している。エルサレム会議における決定の仕方にあらわれているように、その方法は説得による全教会の合意に象徴されることであった。制度的な疑いけを必要としない権威であった。
- ③ Ladd 前出、五三四頁。
 - ④ 教会政治の標準的なパターンは使徒時代にはなかった。教会政治の神学では教会の構造的組織は本質的ではないという。
 - ⑤ 第一コリント一・二。
 - ⑥ W. A. Meeks, *The First Urban Christians* (New Heaven: Yale Univ. Press, 1983), p. 107. 全体を「運動(体)」として表現するとは「この教会」が集団としてのみ、生かす働きを存在せよと指示するのではなく、教会としての実体を現し得ないゆえの限定がある。
 - ⑦ Meeks 前出二〇八頁。
 - ⑧ 第一コリント一・二、二・一。

- ⑧ Ladd, 前出、五三〇頁。
 - ⑨ Meeks, 前出、五二頁。
 - ⑩ 同書、五二頁。(F. Filson の訳語による)。
 - ⑪ 同書、六八頁。
 - ⑫ 同書、一〇九頁。
 - ⑬ G. Macgregor, *Corpus Christi* (London: Macmillan, 1959) p. 229.
 - ⑭ 第一コリント一・二、二・一。
 - ⑮ 同、一四・二三。
 - ⑯ 同、一四・二三。
 - ⑰ 同、一四・二三。
 - ⑱ 同、一四・二三。
 - ⑲ Meeks, 前出、一六頁に詳細な議論がある。
 - ⑳ G. Macgregor 前出、八頁。
- 近代史をマクロ的に見る試みとして W. P. ウェットンの分析は細部にわたってはともかく全体としては十分な洞察を含んでいる。世界的に開発可能部分を残していた彼のいうフロンティアの時代はプロテスタントの時代、個がその可能性を十分に表現できる時代であった。現代はフロンティア後の時代でありそれゆえの変革と再編を必然的に求める時代であると彼は考えている。W. P. Webb, *The Great Frontier* (Univ. of Texas Press, 1964) 邦訳、東海大出版会)。
- ㉑ I. Cundy "The Church as Community" in *The People of God* (Obeying Christ in a Changing World Vol 3, Glasgow: Collins, 1977, p. 10.
 - ㉒ 同書、十頁。
 - ㉓ G. W. Bromley *Historical Theology: A Introduction* (Grand Rapids; Eerdmans, 1978), p. 255.
 - ㉔ Calvin, 同書、一六六頁。
 - ㉕ Ladd, 前出、五三七頁。
 - ㉖ 教会憲章、中央出版社、一一三頁。

- ② 同書、一一四頁。
- ③ 丸山照雄氏は「宗教回帰現象の中の日本人」(『世界』一九八七年五月号)の中で、「カトリックは(神道習俗論補強のために先祖崇拜の積極的とりこみをはじめており、仏教の先祖供養儀礼形式のすべてを容認することとなった」と指摘し、そのすべてがカトリックの壮大な世界戦略に基づくものであることを示している。
- ④ D・ブローシュ「教会の改革的形成」新教出版社、一九八二年、一四五頁。
- ⑤ I. Candy, 前出, 三〇頁。
- ⑥ ブローシュ, 前出, 二七三頁。

(浜田山キリスト教会牧師・聖書神学舎教師)